ロケ地に選ばれる風景とは
富山県を例として

萩原茉夕
芸術文化キュレーションコース
景観研究

はじめに

昨今、“聖地巡礼”や“ロケ地巡り”が旅行や観光の一つの形として隆盛をみせている。これらはコンテンツツーリズムと呼ばれ、観光事業だけでなく、集客事業としても注目を集めている。

コンテンツツーリズムの隆盛において大きな役割を担っているのが、フィルムコミッションである。映像作品の撮影を誘致したり、その撮影の協力を行ったりすることで、その地域の観光客増加や地域活性化が期待されている。

そんな中、富山県ではフィルムコミッションの精力的な活動により、映画やドラマ、アニメなど様々な映像作品のロケが行われている。そこには富山県ならではの特徴的な風景や、その魅力が大きな役割を果たしているのではないかと考えられる。そこで本研究では、富山県内を対象に、映画、ドラマ、アニメ作品内で、ロケ地として採用されている風景とはどのようなものなのか、ロケ地として使われる風景にはどのような傾向や特徴があるのかを明らかにしていく。

研究の方法

対象とする団体を富山県ロケーションオフィスと高岡フィルムコミッション、対象とする作品を高岡フィルムコミッション設立後に富山県内でロケが行われたものとし、富山県ロケーションオフィスと高岡フィルムコミッションの公式ウェブサイトやSNS、各作品の公式ウェブサイトやパンフレットに記載されている情報を参考に、富山県でロケが行われた作品や県内のどのような場所や風景がロケ地として利用されてきたのか調査を行った。

富山県におけるロケ地の傾向

富山県内におけるロケ地の傾向を分析した結果、地域別でみると富山市、高岡市が特にロケ地として選ばれやすい傾向がみられた。また、ロケ地で撮影対象として選ばれている要素としては、電車及びその駅、万葉線及びその駅、民家や街並み、古民家、漁港や臨港道路などが挙げられた。作品ジャンルごとの傾向においては、サスペンス・ミステリー作品では歴史的建造物や観光スポット、時代劇作品では寺社と古民家、特撮・アクション作品では臨港道路、恋愛・群像作品では富岩運河環水公園や総曲輪通り、インド映画では観光スポットがロケ地として使用されていた。アニメ作品はロケ地が1～2つの地域に絞られる傾向があった。撮影年との関係については、高岡フィルムコミッション設立から富山県ロケーションオフィス設立前までは単発TVドラマのロケが多く、富山県ロケーションオフィス設立以降は映画のロケが急増していた。さらに、呉西地区だけでなく呉東地区を含めロケ地が多様化したり、アニメ作品やインド映画のロケが増加するといった変化が起こっていた。

パンフレット・公式サイトからみる富山をロケ地に選ぶ理由

富山県をロケ地に選ぶ理由を考察した結果、以下の4つのケースがあると考えられた。

立山連峰を背景に走る電車の風景が作品コンセプトと合致した『RAILWAYS愛を伝えられない大人たちへ』(2014)のように(1)作品コンセプトと適合する場合、富山県の風景を気に入り『剱岳 点の記』(2009)、『春を背負って』(2014)、『散り椿』(2018)、さらに撮影を担当した『追憶』(2017)でも富山県でロケを行った木村大作監督のように(2)監督がロケ地として好む場合、細田守監督の出身地であったことから作品の舞台のモデルになった『おおかみこどもの雨と雪』(2012)のように(3)製作者のルーツが富山県にある場合、作品の題材の米騒動の舞台であったことから富山県にてロケが行われた『大コメ騒動』(2021)のように(4)原作や史実の舞台が富山県である場合 である。

この4つのケースに共通している理由として、立山連峰をはじめとする自然、全国的に見て珍しい路面電車、古い街並みや文化遺産、地方都市ならではの景観などといった富山県特有の風景が評価されていることが挙げられると考察する。

ロケ地に選ばれる風景とは

富山県内におけるロケ地に選ばれる傾向と富山県をロケ地に選ぶ理由を考察したところ、ロケ地に選ばれる風景は、作品ジャンルやフィルムコミッション活動の隆盛に影響されながらも、立山連峰などの自然、電車や路面電車、古い街並みや文化遺産、地方都市ならではの景観などといった富山県特有の風景であると考える。また、富山県ロケーションオフィス、高岡フィルムコミッションなどの富山県内のフィルムコミッションの活動が安定して行われるようになったことにより、ロケを受け入れやすい土壌が整ったという点も大きく関わっていると言えるのではないかと思われる。

今後、フィルムコミッションの活動がコンテンツツーリズムにつながり、富山県に地域活性化をもたらす可能性は大いにあるのではないかと考える。

［参考文献、URL］
増淵敏之／ローカルコンテンツと地域再生　観光創出から産業振興へ／水曜社／2018
富山県ロケーションオフィス／スタッフブログ／http://www.location-toyama.jp/blog/index.html(参照2020/12/29)
富山県ロケーションオフィス(Facebook)／https://ja-jp.facebook.com/toyama.lo(参照2020/12/29)
高岡フィルムコミッション／高岡市観光ポータルサイト たかおか道しるべ／https://www.takaoka.or.jp/film/(参照2020/12/29)

砺波平野の散居村にみられる石垣の特徴

中島早紀
芸術文化キュレーションコース
景観研究

背景と目的

富山県砺波平野では約200㎢の扇状地に散居村が広がる。散居村とは、耕地の中に民家が点在する農村形態のことである。富山県砺波平野の場合、緩やかな傾斜を持ち容易に水を引くことができる農業に適した場所である一方で、平野の東部を流れる庄川の氾濫による水害が頻繁に起きる場所であったことから、開墾する際に洪水を避けるために小高い場所に家を建て、その周囲に農地を切り拓いていったことが散居村の起源とされる。防風や燃料供給などの目的で屋敷の周囲に樹木が巡らされた屋敷林も砺波平野の散居村の特徴であり、これらの景観は人々が自然環境に対応しながら合理的に生活を送るため培った知恵や努力の表れと言える。

その景観の中で石垣も欠かせない構成要素の一つである。砺波平野では庄川筋から得られる川原石を利用して特色のある石垣が作られた。また水害対策のために石垣を設置した家があることも先行研究で指摘されており、河川が石垣の形態や分布に何らかの影響を与えていると推測される。

そこで本論文では、砺波平野の石垣の特徴は何か、また河川が石垣の形態や分布に与えた影響について明らかにすることを目的とする。

調査地区と調査方法

本論文では石垣の特徴を把握するだけでなく河川と石垣との関係を明らかにするため、河川との位置関係が異なる地区を選定し比較する必要がある。そこで、国土地理院治水地形分類図を参考に砺波平野の旧河道を把握した結果、「現在も過去にも川は流れていない地区」として狐島地区、「かつて川が流れていた地区」として宮村地区、「現在の川に近い地区」として柳瀬地区の三地区を選定し現地調査を行った。

調査項目は、(1)囲いの設置状況、(2)石垣の高さ、(3)囲いの設置方角である。

結果と考察

石垣の設置方角についてみると、調査対象地では東面と南面に石垣が多く設置されていた。これは南西からの季節風が強く吹く砺波平野の自然条件や屋敷の間取り、河川氾濫時の防御の関係で東面と南面が重要な方角として認識されていると考えられる。しかし、その中でも玉石の石垣については、狐島地区では設置方角に偏りが見られなかったのに対し、宮村・柳瀬地区では東面と南面に多く設置されていたことから、河川に近い地区ほど川原石である玉石を用いた石垣を重要視していることが明らかとなった。

また、石垣の積み方についてみると、現在の川に近い柳瀬地区において玉石の亀甲積み(図1)が非常に多く見られた。玉石の亀甲積みは見栄えが良くステータスシンボルとしての役割も持つが、手間と費用がかかる積み方であることから、柳瀬地区では玉石を用いた亀甲積みの石垣に特別な愛着や誇りを持っていることが伺える。

そして、接道面での囲いの設置状況についてみると、各地区全体での囲いの設置率と比較して大きな差は見られなかったことから、砺波平野では現在の囲いの設置状況に道路が強い影響を与えたとは考えにくく、昭和30年代に始まった道路整備以前からの環境要因が設置理由となったものが多いと推測された。

図1　玉石の亀甲積み

砺波平野の石垣の特徴

砺波平野の石垣の特徴として以下を指摘できる。

一つ目は、玉石の石垣が多く見られることである。河川から近い地区はもちろん、河川から離れた地区においても一定数の玉石の石垣が分布していた。これは庄川の存在により玉石が豊富に得られたことが理由として挙げられ、亀甲積みに代表される玉石に特徴的な積み方が見られることも砺波平野の石垣の特徴と言える。

二つ目は、河川に近くなるほどその影響が石垣に表れていることである。石垣の高さや積み方、設置方角において、河川との距離により明らかな差が見られた。このことから、砺波平野において河川は散居景観を生み出した重要な要因であるとともに、景観を構成する石垣についてもその形態や分布に強い影響を与えており、その特徴は河川に近いほど強く表れている。逆にいえば砺波平野において石垣はその地区がどの程度河川との関係が深いのかを示す指標のような存在となっている。

[参考文献]
参考1)鈴木孝文／環境共生型居住空間としての散居村の保全／農業土木学会誌69(1) ／2001 ／pp.45－46
参考2)佐伯安一／富山県の民家の石垣／とやま民俗47／1995／pp.11－15

女性狩猟者の実態について

「狩女の会」を事例に

北山のどか
芸術文化キュレーションコース
まちづくり

研究の背景と目的

近年野生鳥獣による農作物や林業への被害が問題となっている[1)2)]。対策の1つとして野生鳥獣の捕獲が求められるが、捕獲従事者である狩猟者の数は減少傾向にある。また減少と同時に高齢化も進んでおり[3)]、今後狩猟者の数は大きく減少することが予想され、若い世代の人材確保が求められている。一方で近年、女性の狩猟免許所持者数が急激に増加している[4)]。本研究では、伝統的に男社会である狩猟の世界に女性が参加するようになったきっかけや活動内容、苦労したことや狩猟の魅力などを把握するとともに、女性狩猟者が狩猟業界にもたらす変化等を考察することを目的とする。

調査方法

調査は主に女性狩猟者へのヒアリング調査によって行った。対象としては石川県内の女性狩猟者によって発足した「狩女の会」という組織に所属、あるいは所属した経験のある女性狩猟者とその周辺の狩猟者の計7名である。また、既存の文献で紹介されている女性狩猟者計5名の活動実態についても取りまとめた。

結果

7名のヒアリングと5名のインタビュー記事[5)]をもとに、「女性が狩猟を始めたきっかけ」「女性狩猟者の活動の傾向」「女性狩猟者がもたらす変化」についてまとめた。

女性が狩猟を始めたきっかけとしては「自身や周囲の人が獣害に遭ったこと」「食べることに興味があり自分で捕って食べたいと思ったこと」「周囲の人が狩猟を行っていたことで興味を持ったこと」の3パターンがみられた。

女性狩猟者の活動の傾向については「活動形態」「苦労したこと」「女性であることのメリット／デメリット」の3項目で見た。活動形態としては「有害鳥獣駆除隊員として班で活動」「猟隊を組み活動」「単独猟」「少人数での活動」の4種類に分類できた。苦労したこととしては「体力面での苦労」「周囲の反応による苦労」「狩猟を始める際の情報の取得に関する苦労」の3種類にまとめることができた。女性であることのメリットとしては「解体作業の丁寧さ」が挙げられ、デメリットとしては「体力」「性別を意識されること」等が挙げられた。

女性狩猟者がもたらす変化については「狩猟の魅力の発見」「狩猟業界に女性が入ることのメリット/デメリット」の2項目で見た。狩猟の魅力に関しては3種類に分類でき、また狩猟業界に女性が入ることのメリットに関しては3点が挙げられたが、デメリットに関しては特段重要なものは挙げられなかった。

考察

「狩女の会」が果たしてきた役割としては、「興味を持つきっかけづくり」「情報提供の場」「ネットワーク形成」の大きく3つの役割があり、中でも身近に同性の狩猟者が少ない女性にとっては情報提供の場としての役割が重要であると考える。

女性狩猟者の活動実態について考察すると、まず狩猟を始めたきっかけとしては身近な獣害によるものが多く、そこに関して男女の差はないと考えられる。女性狩猟者の活動の傾向に関しては、捕りたい獲物や狩猟に割くことのできる時間、自身の体力などに合わせて狩猟形態を変えているということが明らかになった。それぞれが無理の少ない形態をとっており、体力面を考慮した形態の違い以外には、男女による形態の差はあまり見られないと考えられる。女性であることのメリットとしては狩猟の時間の作り方が挙げられた。しかし男女の差に関して「考えたことがなかった」「性別の違いを感じたことがなかった」とする人が多かったことから、狩猟をすることに関して体力の差と時間の作り方以外には男女の大きな差はないのではないかと考える。女性狩猟者がもたらす変化に関しては、業界に多様性が生まれたことで狩猟を始めるハードルが以前よりも下がっていることが指摘できる。狩猟の魅力としては、「食」を挙げる人が多く、料理をすることの多い女性はそういった面でも活躍できると考える。また、食を通して命について学ぶ機会を提供することも、現代社会の中では重要な魅力といえるだろう。

［引用文献、URL］
1）農林水産省「野生鳥獣による農作物被害状況の推移」
https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/hogai_zyoukyou/attach/pdf/index-5.pdf
2）林野庁「鳥獣別森林被害面積の年度推移（平成26～30年度）」
https://www.rinya.maff.go.jp/j/hogo/higai/attach/pdf/tyouju-75.pdf
3）環境省「年齢別狩猟免許所持者数」
https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs4/menkyo.pdf
4）環境省「平成20年～平成28年度度鳥獣統計情報」
https://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs2.html
5）田中康弘／女猟師　私が猟師になったワケ／枻出版社／2011

メルヘン建築は小矢部市のランドマークになれたのか

地域づくりとランドマークの役割

沼田和佳奈
芸術文化キュレーションコース
景観研究

はじめに

ランドマークには地域アイデンティティの象徴としての役割がある。1980年代前後から日本各地で地域アイデンティティを求める動きが高まっていった中で、富山県小矢部市では現在「メルヘン建築」と呼ばれる一連の公共建築が建設されていった。このメルヘン建築は国内外の著名な西洋建築やおとぎの国のイメージを引用した外観が特徴である。本論文ではメルヘン建築の成立過程、外観上の特徴、市民の認識の大きく3つの観点からメルヘン建築が地域のランドマークとしての役割を果たしているのか、また地域イメージにどのような影響を与えたのかを検討した。

メルヘン建築の成立過程

松本市長の時代（1972-1986）に建設が進められたメルヘン建築は、次第に引用モデルが複雑化し、独特な外観を持つ建築群となっていった。建設当初莫大な建設費や豪華な外観に否定的な意見も挙がったが、市長独自の公共施設の建設理念のもと1992年までに35のメルヘン建築が建設された。建設が終わった後も市や民間企業がメルヘンのイメージを利用したまちづくりを進めたことで、小矢部市に「メルヘンの街」の地域イメージが根付いていった。

メルヘン建築の外観上の特徴

現存するメルヘン建築34件に対する現地調査から、外観の維持状態、地域別の建築数、建物の認識距離、立地の4点について整理した。また、メルヘン建築を引用モデル別に5つのタイプに分類した。図1のように次第に複雑化した引用モデルが建設の終盤期には単純な引用モデルに回帰する傾向にあった。また、現地調査で明らかとなった4点と5つのタイプ別にメルヘン建築を比較すると、周辺から認識しやすい建築は引用モデルが複雑であり、塔状構造物を持つ建築である場合が多い。これは主に学校建築で見られるが、老朽化の目立つ建築も多く、独特な形態は外観の維持を困難にしていると考えられた。

メルヘン建築に対する市民の認識

104名に対するアンケートから、多くの市民が地域のシンボルであると認識していることが明らかになった。周辺から際立った特徴的な形態が美しさや豪華さを感じさせること、多くの市民がメルヘン建築に対する思い出の経験を持っていることなど、ランドマークとしての役割に密接に関連する視認性、認知性や場所性が強い建築が複数存在した。特に小矢部市を離れた人にとって、メルヘン建築はふるさとを連想させる象徴性が強い建築であると認識されている。その反面、建物本来の機能との関連の薄さや周辺の景観となじまない特徴的な形態から、メルヘン建築の存続に否定的な意見も多く見受けられた。

考察

メルヘン建築がもたらした地域イメージや、市民が抱く思い出の経験の強さは愛着や親しみを醸成させ、メルヘン建築は次第に地域のシンボルとして認識されるようになった。以上のことからメルヘン建築はランドマークとして地域アイデンティティを与える一定の役割を持っていたと言えるが、メルヘン建築は機能性の弱さや周辺の景観との不調和、外観の維持の困難さといった理由により存続を期待されず、一時的なランドマークにとどまったものも多いと考えられる。

［主要引用文献、参考文献］
参考1）津川康雄／ランドマーク　地域アイデンティティの表象／古今書院／2018
参考2）中川理／偽装するニッポン　公共施設のディズニーランダゼーション／彰国社／1993
参考3）小矢部市／小矢部市史　-市政四十年史編-／小矢部市史編纂委員会／1984
参考4）小矢部市／ふるさとガイド小矢部／小矢部市総務部企画情報課／1984

年代	引用タイプ	主な建築
1970	イメージ引用型 明確な建築モデルはなく、漠然としたテーマの引用	 萩波保育所 (1976)
	日本洋風建築複数型 主に明治～昭和初期の日本の西洋風建築の組み合わせ	 蟹谷小学校 (1979)
1980	日本洋風＋海外建築型 日本の西洋風建築と国外の建築の組み合わせ	 大谷中学校 (1984)
1990	イメージ引用型 単純な引用モデルへの回帰	 正得駐在所 (1992)

図1）メルヘン建築の形態変遷